



雨の朝

ラトヴィア・リーガ市在住

黒澤 歩



普段は静かな国会そばのリーガ旧市街

秋、ラトヴィアは雨の多い季節を迎えます。いったん降りをはじめたら、しばらく続きます。その雨が冷たくなってきたと思ったら、そのうちに雪に変わります。雪に変わるまでの雨続きの日々が、一年のラトヴィア暮らしを通じていちばん暗い時期でしょう。この暗さに減入りがちなのは、なにも南国から来た外国人に限りません。この暗い時期にあの世から魂が帰ってくると信じたのは、アメリカのハロウィンにもルーツが通じる習俗だといえます。11月の最終週は死者追悼の日とされ、国中の墓地には蠟燭が灯され死者の魂を迎えます。秋の寂しい闇夜に灯るしっとりと美しい光景です。日本というお盆の迎え火とよく似ています。こうして、人々は古い昔から暗い秋を受け入れてきたのでしょう。

雨の日の難題

人と違って、いつになっても少しばかりの雨にも対処できないのが道路です。悲惨な道路は、未だに地方都市や田舎ばかりではありません。首都リーガは、過去10年の間に目覚しく発展し、国内主要道路もEUの助成金を受けて整備されてきたというのに、地元に着した市内道は散々です。ちょっとした強い雨が降れば、あちらこちらの路上はたちまちプールと化

してしまいます。それに拍車をかけるのが、EU一悪評高い(交通事故の死亡者数の絶対数は、EU25カ国内で最高)荒々しい運転マナーで、市内道路を高級車が水しぶきを上げてゾクゾクと走りすぎて行くのです。まったく雨の日の歩行はらくじゃありません。

この秋、ある豪雨の朝、私は勤務先の大学外国語学部の建物から、市内にある別校舎の経済学部に、同僚と一緒に急いでいました。経済学部に移動するのは、経済学部の学生に日本語を教えているからではなく、教室が足りないからにすぎません。教室にあわせて、学生も講師も30分の休み時間をひたすら移動しています。同僚はといえば、授業に必要なCDプレーヤーを抱えて歩いています。太る暇もない、というほど体力勝負の仕事です。

「各学部でプレーヤー一台ごとき借りられないのか」と尋ねてみました。用事があって出向く大学事務室には、いつもラジオや音楽が鳴っていることを思い出したのです。ところがそこでは、「一度ならいいけど、毎回は授業に貸せない」と断られたそうです。それで、彼女はそのままの小さい体はずしりと重そうなCDプレーヤーとのリーガ市内横断を、毎週繰り返しているというわけです。「なんだか腑に落ちない話だな」と思いながら、私たちは向ってくる人ごみを

避けて進みます。そして、路肩に水しぶきを上げて車が走りすぎたときに、指している傘を腰脇に回します。そのうちに雪が降れば、今度は屋根からつららが落ちてこないかと、ひやひやしながら歩く日がやってくるのです。

傘の革命

その同じ朝、ラトヴィア国会前に5千人もの人々が集まりました。議会多数派を背景に、このごろ国政に横暴さが増した政府に対する抗議行動です。集会を呼びかけたのは、映画監督、作曲家、人気俳優や女優、作家、画家、テレビタレント、テレビニュース報道官、新聞社編集長、学者、評論家ら、有名人ばかりです。前日の午後に呼びかけられ、平日の早朝のそれも大変な豪雨だというのに、ソ連からの独立宣言採択を求める群集(1991年)以来の、広範な庶民による大規模な集会となりました。

「傘の革命」、「この国を守ろう!法律無視糾弾!」、「平和な時代は終わった」、「紛争を避けよう」、「嘘はもうまっぴら!」いずれも翌日の新聞に見た大見出しの文句です。そして、抗議集会は日を追うごとに拡大し、ついに現政権の首相を辞任させることになりました。庶民には政治を変える力があることを、ふと気づかせてくれた出来事です。